つづく　つながる　夢が育つ学び舎

国立二小だより

令和３年(2021 年)3 月 12 日
国立市立国立第二小学校
校長　小林　理人

3.11を忘れない

校長　小林　理人

東日本大震災から１０年が経ちました。コロナ禍でよく耳にするようになった「未曾有」(みぞう)という言葉が使われるきっかけになったのもこの大震災だったように思います。多くの尊い命、大切なものが失われ、これまで見たことのない惨状がテレビの画面を通して全世界に発信されました。まさに「未曾有」のこと、経験したことのない惨状でした。

そして、その時に感じたことは自然の力の大きさでした。１０年前に発生した地震や津波は当時の私たちの想定を大きく超えていました。そして、「想定していないことが起こりうる」ことを踏まえた備え、計画が必要であることを痛感しました。また、その時に感じた「想定していないことが起こりうる」ということを忘れてしまわないように、後世に伝えていくことの大切さも感じました。

大震災から１０年目となる今年は、この震災を話題にしたテレビ番組や企画が多く、関心をもっている子供たちも多いようです。大惨事ということではコロナ禍と重なることもその理由のひとつかもしれません。

そこで、本日実施した本番を想定した予告なしの避難訓練の後、毎年繰り返し行われている避難訓練の目的や意味を子供たちが考えるために、１０年前の大震災の時に二小で起きたことや私が感じたことをもとに、裏面のような話をしました。この話を通して、子供たちに伝えたかったことが２つありました。

日ごろの訓練の大切さ

１０年前の大震災では、それまでの避難訓練で行ったことを活かす場面がたくさんありました。地震が発生した時の身の守り方や、地震発生後の登下校の仕方などは、ほぼ計画通りに実施しました。

しかし、想定外のこともたくさんありました。余震への備えや、交通網の麻痺、停電への対応など、計画の見直しや、新たな計画の作成等、すべきこともたくさんありました。

そこで、子供たちには避難訓練や災害時の計画を実際に起きうることとして考え、よりよい計画を立てたり、計画に基づく訓練を真剣に行ったりすることの大切さを伝えました。

協力すること助け合うことの大切さ

多くの方の尊い命や、大切にしているものが失われました。さらに、交通網の麻痺や停電等により、日常生活が一変しました。その中で、私たちの不安な気持ちを和らげ、安全、安心な生活を支えたのは、力を合わせたり、できないことや困ったことを助け合ったりする人と人とのつながりでした。

子供たちには、その時に改めて感じた、みんなで協力しあうことや助け合うこと、励ましあうことなど、人と人とのつながりの大切さを伝えました。また、この時に感じたり気付いたりしたことが、今のコロナ禍の生活にも活かされていることや、二小の力になっていることも話をしました。

そして、最後に皆で黙とうをし、この震災で亡くなられた方のご冥福をお祈りしました。

今年度の避難訓練が無事終了しました。子供たちは、大震災の話をもとに、いつ起きるかわからない災害に備えた避難訓練の意味や目的について考えました。ご家庭でも、今日の避難訓練で子供たちが考えたことや感じたことを聞いていただき、１０年前の大震災を振り返り、ご家庭でできる日常の備え等について話題にしていただけると有難いです。

大震災の発生

２０１１年３月１１日(金)、午後２時４６分、大きな地震がありました。二小では６時間目の授業(委員会活動)が行われていて、学年によっては既に下校したり、下校途中だったりした子供もいたそうです。大きな揺れで棚から物が落ちてきましたが、教室にいた子供たちは、普段の訓練通り、机の下にもぐり身の安全を守るための行動をしたのでけが人はありませんでした。先生たちは、校舎の安全が確認されるまで校舎内にいることは危険だと判断し、全員校庭に避難しました。みんな不安な気持ちをもちながら、普段の訓練通り落ち着いて静かに校庭に整列したそうです。その後、３月の肌寒い日だったので体育館に移動し、お家の人の帰宅が確認できた児童から下校しました。全ての児童が安全に帰宅できたそうです。

校長先生がその時に勤めていた学校でも二小と同じように、不安の中でみんなが落ち着いて避難ができ、ほっとしたのを覚えています。

その後、テレビを通して被災地の状況を知りました。目を疑う津波の惨状、都内の交通網の麻痺等、時間を追うごとに被害が大きくなりました。そして、被災地では多くの方が亡くなったり、行方が分からなくなったりしました。

１２日(土)に福島原発の事故の報道がありました。２日間の休日は、刻々と深刻さを増す被害の情報に悲しみと不安で一杯になりました。

１４日(月)は、皆が不安や心配な気持ちを抱えて登校しました。全校朝会では、この震災で亡くなられた方のご冥福をお祈りし、黙とうをしました。

そして、その後の学校生活も大きく変わりました。みんなの命を守るためにすべきことをみんなで考え工夫しました。これまで訓練していないことや想像できなかったこともありました。

地震後、一番の心配は余震でした。しばらくは大きな地震がいつ発生するかわからない状況が続きました。登校時は保護者、地域の方が見守ってくださり、学校生活では防災頭巾を持ち歩きました。

困ったことは停電でした。地震のため発電所が止まり、電気が十分に送られてこなくなりました。計画停電(時間を決めての停電)により、信号が使えない時間帯もありました。そこで、下校時に信号が使えない時は、先生方が付き添いながら下校をしました。

停電により私たちの多くは、電気の使えない生活を初めて経験しました。電気のつかない教室での授業、テレビやパソコン、マイク、チャイム、水道、トイレ・・・今まで当たり前に使えたものが使えなくなりました。一番困ったのが給食でした。停電や食材の不足から、メニューも大きく変更されました。また、エレベーターが使えなくなり、階段を使って給食を運びました。

地震後の生活では、足りなくなったものを節約し、できなくなったことを協力し合ったり助け合ったりすることで余震や停電による不安や不便を乗り越えていきました。

震災を通して感じたことは

１０年前の震災を経験して感じたことが２つありました。ひとつは**日ごろの訓練の大切さ**です。毎年、同じ訓練の繰り返しですが、実際に訓練したことが起きることや、訓練していないこともする必要があり、訓練の大切さを強く感じました。

もうひとつは、**協力すること助け合うことの大切さ**です。子供たちや先生方の中には、家族や親戚が被災した人もいました。また、余震の恐怖におびえたり、停電により様々なことができなくなったりしました。日常の生活が大きく変化し、不安と悲しみの中で学校生活を支えてくれたのは、協力したり助け合ったりできる友達でした。また、子供たちや学校を支えてくださった保護者、地域の方でした。協力や助け合いの大切さ、有難さを改めて感じました。